

までも、以前の遺名にて江戸町御亭など、唱へ、押立て、蓮池御殿などとは不稱躰也。されば御殿と唱ふるは、是よ皆寶曆の火災後の建物なりと云々。平次接するに、延寶四年九月に御町敷造營あるを、蓮池亭の起本といふは非なり。寛文年中既に蓮池亭のありしこと、田邊政巳筆記にて知られけり。又文政二年に藩主十二世權中將齊廣君、蓮池と呼べる溢觴等を穿鑿せらるゝに付き、富田景周より書き上げたる考説左の如し。

卷之三

蓮池は、古來よりの名に非す。御塹の名に蓮池あり、その邊りにある地なる故、後人蓮池と音にて唱へ、蓮池とその名を分つよしなり。蓮池の名は、樹樂橋など、いふ類にて、そのいにしへ本源寺尾山在城の頃よりの名なり。其の頃は、今のやうに水なく、からぼり也。寛永九年に微妙公辰巳の水道御開通より水塹となるよし、關屋政春の古兵談に記せり。此の蓮池の地は、天徳夫人御入輿以後、江戸町と

ませらるといふ事は、舊記にも見當らず。今の御亭どもは、皆々 寅暦の火災後の御建物なりといへり。貞享三年八月十五日に、御拜領の駿足をば蓮池の御亭にて大老以下の人々へ見物仰せ付けられ、且御拳の鷹の雁を賜食仰付らるゝ事、年表に見えたり。一舊記に、此の日既に夜に入り、大夫以下風雅の輩に命じて、明月の詩歌を獻ぜさせられ、奥村庸禮父子の詩歌を公賞し給ふとあり。しかれば蓮池の

に、此の御亭にて御射手十九人の的矢を命ぜられ、御覽あり。その姓名等は爰に略す。此の度延享四年十月十日に、謙徳公此の亭において、年寄衆横山貴林・本多政昌・前田直躬・奥村修古の四人に紅葉見物仰付けられ、嘉三郎君御詠歌遊ばされ、年寄衆は詩歌を奉れり。同月十三日・十九日にも、追々見物仰付けられたり。是より後年にも折々此の事ありといへども今こゝに略しね。

卯月晦日

富田知龍翁考

接するに、右は文政二己卯年也。富田氏は文政元年十一月廿七日、七十三歳にて致仕、痴龍翁と稱し、養老料五百石を賜はり、翌二年は七十四歳なり。

て關東より御附の人々の小屋、此所にあり。又古圖に此所に作事場と記せるは、御年譜等に、萬治二年七月作事所を改め建つと載するものにして、即ち故作事の遺號是なり。又晉家見聞集に、萬治二年七月、御作事所を奥村河内築清が門前の明地に建てさせるとあるも、是と同所なり。是は此の時の河内居宅いまだ今の學校の地にありし時の事なり。此の地を退くは、元祿九年にあり。按するに、此の作事所出來の頃は、最早關東よりの御附小屋も御取拂ひ後の故なるべし。蓮池御殿は、延寶四年九月の舊號に、故作事所に御座敷建てさせらる。其の時の奉行金子安左衛門・中村兵左衛門とあり。按するに今の御作事所の地、御作事所となるは、此の時此に御座敷御造營に付、轉地仰せ付けらるると思はるゝ也。是即ち此の蓮池に御造營ある起本にして、是を後に御殿とも稱せし成るべし。其の頃は、いまだ何事も質素の時節ゆゑ、御座敷とは唱へ、また貞享の頃までも、以前の遺名に而江戸町御亭など、唱へ、押立て蓮池御殿など、は稱せざる躰なり。されば御殿と唱ふるは、是より後の事なるべし。改めて御殿と稱し、後に御用に無之た